

生き方と死に方ー母の「闘い」

2016年6月、わたしの母は87歳で人生を閉じました。

紫陽花の季節になるとあの日を思い出します。

母は父と二人で生活をしていました。

そこから遡ること7年、手指の震え、感情の乱れなどの異常が始まりました。

当初受診した脳神経内科でも確定診断はつきませんでした。

では、精神の問題なのかと精神科にも受診、それでも診断はつきません。

そして更に脳神経内科での詳しい検査が始まりました。

京大付属病院を医師から紹介され検査入院。そこでの検査でやっとついた診断は「大脳気質基底核変性症」という難病でした。

この病気は人口10万人あたり3.5人程度のまれな病気です。

この診断を受け、退院したのもあじさいの季節でした。

パーキンソン病と似た症状であるのに、症状を緩和する薬は効かない。家族にも本人にも絶望を感じさせるには充分でした。

そんな過酷な病気になっても「生きているうちは頑張らんなあ」と母は病に向き合って生きていました。

その思いを父も受け止めて、二人での在宅療養が始まったのです。

父もわたしも母の変化を日々見つめていました。

歩行器で歩いていたのが歩けなくなり、言葉が発することも難しくなりました。口に入れた薬は飲み込むことができなくなり、口を開けてもらおうと錠剤が残ったまま。

そんな変化を見るたびに、その変化に絶望を感じたものでした。

しかし父の献身的な介護はホームヘルパーやデイサービス、訪問看護、ショートステイ後からも借りながら続けられました。

…つづく



ちょっとヘンなばばちゃんのこと ④

私の母（通称 ばばちゃん）は、80歳 3年前は要支援 現在要介護2



温泉旅行から帰宅してすぐに、糖尿で通院しているかかりつけの病院へ電話。

「すこし相談したいことがありまして、そちらに内科で通院している母のことです…胸にしこりがあるようなんです。胸の皮膚がひっぱられてえくぼのようにみえます…よく見ると乳首がテカテカしていて膿が出た後に乾燥しているような感じがです。」と、具体的に話しました。

そこは、総合病院です。一報したときは、受付の女の人から「紹介状は？」「紹介状がないと…」などと言っていた気がします。ですが、こちらが「え～？どうしよう～!!」と動揺していると、すぐにその日の相談窓口の看護師さんに電話を変わってくれました。その方は「心配ですね、すぐに何とかできるように手配しましょう!」と言ってくれて、すごく安心しました。

乳腺外来も院内にあるし、内科にかかっているのにお役所のような手続きがいるようで、病院も大変だな…。後でわかりましたが、通院している総合病院内の、内科の医師が同じ病院内の外科の医師に紹介状を書くという裏技で？裏技？かどうかわかりませんが、とにかく検査の予約をすぐに取ってくれたようです。

外科の診察での後すぐとりあえず、まずマンモグラフィー、血液検査、エコー検査。その時の検査は姉が付き添ってくれました。

検査結果は2週間後。その日は病院に娘たち3人、その孫3人、ひ孫2人とみんな病院に集まりました。ちょう本人の母はなんだか上の空。みんな集まってどうしたの？と…動揺していないかな？心配していないかな？と思って「大丈夫？」って聞くと、「何が？大丈夫やで、元気」とにっこり。

診察室に入り先生の診察です…「乳がんでしょう」Dr.に告げられました。このときのばばちゃんは、人ごとのような顔をしていました。本人は理解できているのかな？

すぐに入院、手術です。手術の準備も大変おもしろく…と言ったらへんですが、短期間の入院にマスクを箱で100枚入れてあったり、下着を大量にいれてあったり…準備しようとする気持ちはあったよう…。

幸いにも手術は無事に終わり、現在は順調に回復へと向かっています。医師の方々の迅速な対応と丁寧な説明、そしてなによりばばちゃんの明るさに支えられ、家族一同ほっと胸をなで下ろしました。

ヘルパーN

…つづく